

えにしアカデミー 学び深まる

「滋賀の福祉人たちの新しい学びのカタチ」
えにし
アカデミー
令和3年（2021年）10月 開学

10月4日に開学したえにしアカデミーはここまで（令和4年6月8日現在）23回のオンライン講義、2回の集合講義、15回ゼミを行ってきました。塾生は現場のでの仕事と並行しながらの学びですが、学び方の主がオンラインだからこそそれを可能にしています。

オンライン講義では60分のフェローの講義があり、その後30分は塾生同士によるグループワークやフェローとの意見交換がなされています。塾生は60分の講義で得た学びを、グループワークや意見交換でさらに深めています。

えにしアカデミーの修了までの課程は2年間ですが、すでに福祉の専門職としての学び、気づき、発見が生まれてきております。塾生からも「専門外のことを学べる機会を設けていただき大変ありがたい」「もっと講義を増やしてほしい」などの声がでており、えにしアカデミーでの学びが実りあるものになってきています。

*えにしアカデミーでは、滋賀が誇るべき福祉の実践者および、えにしアカデミーに熱意をもって賛同いただいた学識経験者（「フェロー」と呼称します。）が講義やゼミの指導を行います。

塾生の声

一人の力で大きくことを動かすことは難しいですが、他分野の団体とつながりあうことで、新たな気持ちでその家族と向き合えることは、このえにしアカデミーで学んだことが活かされつつあると思わずにはいられません。

（保育分野60代）

えにしアカデミーの講義をこれまで受けてきて、「あたたかい地域になるには、どうしようか」と、わくわくするような気持ちで考えていこうとする自分が、少しずつ育ってきているのではないかと、感じています。

（児童分野40代）



▲R3. 10. 22原田正樹フェロー（日本福祉大学）



▲R3. 11. 12湯浅誠フェロー（東京大学）



▲R4. 4. 26集合講義「文を書く」

レジリエンスを我々が高めるためには、課題を我が事としてとらえる力や視点を持つ必要があります。ブレイクアウトルームでも他分野の仲間と少し話すことで、今後のつながりに広がります。私たちが越境し、えにしアカデミーの仲間とつながり、連携し、助け合い、地域福祉を推進できるように、30名の仲間ともっと知り合いたいと考えます。

（社協40代）

子ども若者ケア-実態調査 結果報告

生きづらさを抱える子ども若者の実態把握を目的に、滋賀県社会福祉協議会では県の委託により、県内の子ども・若者ケアラー（ヤングケアラー）の実態調査を実施しました。

県内の全小中高等学校を対象に実施した調査（教員が回答）では、84.2%の学校から回答をいただき、該当者が「いる」学校は49.8%（165校）となりました。該当者数の合計は590人でした。

また、該当者がケアしている人は「きょうだい」（59.4%）が最も多く、次いで「母親」（38.9%）となりました。ケアの具体的内容は、多い順で「きょうだいのケア」（49.6%）、「食事以外の家の中の家事」（38.4%）でした。

本調査は、学校のほか、民生委員・児童委員や、地域の相談支援機関にも実施しました。その結果、日常的变化や子どもたちの不調に気づきやすいのは学校である一方、多くの教員が家庭内の問題に介入することに難しさを感じていました。また、民生委員の調査では「言葉を初めて聞いた」「支援のあり方がわからない」という記述も多くありました。

「ヤングケアラー」という言葉を聞く機会は増えましたが、まだその存在が社会に十分に理解されているとは言えません。滋賀県社協では今後も啓発に努め、地域で支える仕組みづくりにつなげていきます。

（調査結果の詳細は本会HPでも公表しています）



滋賀の縁創造実践センター ひたすらなるつながり を紡ぐ

「今」のえにし
事業を会員の
皆様にお届け！

70周年 感謝！

えにしNews



滋賀県地域養護推進協議会 2年目！

発足2年目を迎えました！

滋賀県地域養護推進協議会は発足2年目を迎えました。当協議会では、社会的養護を経験した若者をはじめ、生きづらさを抱えた若者に対して支援を行っています。

現在は主に、「個別支援」「居場所活動」「地域養護」の周知」の3つを軸に取り組んでいます。

「個別支援」は若者の抱えている問題を解決していくことが目的です。若者の話を聴き、本人の意志を尊重し、他者の協力も得ながら、共に乗り越えていく取り組みです。

「居場所活動」は、問題解決を目的とするものではなく、繋がりをつくる、もしくは繋がり続けること自体を目的とした取り組みです。参加者が立場を超えて豊かな時間を共に過ごし、心のエネルギーが充電されるような憩いの場づくりをすすめています。

「地域養護」の周知も非常に重要です。生きづらさを抱える若者たちが、彼らの主体的選択のもと生きていけるような、またその過程で、彼らが引け目を感じることなく地域で支えられながら生きていける地域づくりも担います。

参加する若者からは、「この居場所について「実家のような存在で楽しい空間」、「当たり前のように来る場所」「自分が自分でいれる場所」との声が届いています。

また、支援者からは「少しずつ頼ってくれるようになってきた」等の変化への喜びの声があり、しっかりとした信頼関係が築かれています。



▲野外でバーベキュー。スタッフも一緒になって楽しめます。



▲マザーボード（守山市）の2階はゆったりとくつろげるスペースとなっています。

女性のつながりサポート事業 スタート

コロナでお困りの方への架け橋

「女性のつながりサポート事業」では、ほっと一息つけるような場づくりや生理用品の配布、必要な支援につながるようなサポート等、困りごとや不安を抱えられた女性がつながりを回復される小さな手助けをしています。

居場所提供でご協力いただいている団体から届いた声を紹介します。

「夫以外の大人と久しぶりに話した。」
「どこにも行けないから、ふつつつとしていた。」
「1時間でも話せる場所があること、つながったという実感が救いになると感じた。」

本事業については
こちらから ▶▶



*本事業にご協力くださる団体・施設のみなさまを引き続き募集しています。





遊べる・学べる淡海子ども食堂

これまでの子ども食堂の活動の中で、最も印象的な変化「子ども・スタッフ・地域がこんな風変わった！」が起こったエピソードを共有し、子ども食堂が地域の中でどんな存在かを子ども食堂実践者と考えるワークショップを開催しました。

その中で、「子ども食堂開設1周年の時に、小学3年生の子ども達から寄せ書きをもらい、その寄せ書きの真ん中に「これからもエゾン（子ども食堂）を大切にしていけます」と書いてあり、子どもたちにとって子ども食堂が大切な居場所になっていることをみんなで実感できました。

コロナ禍においても居場所型の開催や食材の提供や弁当配食等、アイデアや工夫であたたかなつながりが続いています。今年度子ども食堂フェスタは、2回実施予定です。



▲子ども食堂あおぞら
第1回開催日、会場には子どもから大人までみなさん明るい笑顔が広がりました。



男性保育者プロジェクト

（滋賀県保育協議会との共働）

保育分野における福祉人の確保と定着をめざして始まったこの取り組み。令和3年度は新たに集った企画委員15名が、学習・情報交換会を実施しました。

コロナ感染拡大により小規模のプレ企画となりましたが、各園での保育内容についての情報交換や委員同士の「男性保育者あるある」話や保育のやりがい、悩みを語り合うなど濃厚なひとときとなりました。参加者からは「同じような悩みを持っている先生がいることを知れてよかった」「ここでの出会いを自信に変えて、現場でより良い保育につなげたい」等の声がありました。



▲第1回学習&情報交換会。
現場で活かせるロープワーク等を楽しみながら挑戦しました★



社会福祉法人等と協働した フリースペースの推進

去る6月3日に子どもたちの夜の居場所フリースペースを実施されている施設および県・市社協の職員で2年ぶりに交流会をしました。社会福祉施設がゆえのコロナ禍での再開のタイミングの難しさや、実施中止中に再び子どもが不登校になってしまったことなど課題がある一方で、家庭訪問（宅食支援）をすることで保護者と話す機会になったなど、子どもたちとつながり続けるための工夫など実施状況をお聞きいただきました。



▲自由遊びの時間。子どもたちが特に楽しみにしている時間です。



社会的養護のもとで育つ 若者と社会の架け橋づくり

社会的養護のもとで育つ子どもたちが地域の働く大人と出会い、職業観を育む自立に向けた土台作りの「ハローわくわく体験事業」。5～6月に各児童養護施設等において、企業の方を招いてプロフェッショナルセミナーを開催しました。参加した子どもたちは、「仕事の話」や「仕事プチ体験」等企業との交流を通して、「将来どんな仕事に就きたいか考えるきっかけとなった」、「仕事について深く真剣に考えることができた」と、働くことのイメージを深めました。



▲パンづくりの仕事を体験！
（@プロフェッショナルセミナー）



ひきこもり者・家族とともに歩む地域づくりの推進

県内の支援機関や団体と連携しながら、ひきこもり状態にある方と家族が地域で孤立しない地域づくりを進めています。

ご家族が安心して情報を得る場として開催している家族教室では、精神科のドクターや支援者のお話を聞いた参加者から、「ヒントをいただいた」、「収穫のある時間だった」等の声をいただいています。

また、「ひきこもり電話相談」は、令和3年度167件の相談がありました。広域電話相談の特性として、ご本人からのお電話が約3割を占め、「話を聞いてほしい」というニーズが多くあります。県内9機関協働による一斉電話相談は、今年度も参画機関を拡大し9月・2月に予定しています。



はたらく体験

働きづらさを抱えた方を対象にした月1回の仕事体験（県社協事業のお手伝い）の取組です。昨年度はイベントの準備物作成や資料の封入・発送、パソコン作業、車いすの点検・清掃等に延べ71名の方に参加いただきました。参加者からは、「自分から人に話しかけることが出来た」、「仕事体験に参加すると達成感が得られる」などの良い変化があったというお声や、継続して参加されていた方が、はたらく体験を卒業して、就職が決まったという嬉しいご報告もいただいております。昨年度、PC作業を希望する体験者の声から生まれ、スタートした居場所、「PCスポットぼちぼちいこか♪」は、パソコン知識の習得と共有をめざして一人ひとりのペースを大切に、「ぼちぼち」すすめています♪



重度障害児者の入浴支援事業

（滋賀県障害者自立支援協議会との共働）

重度障害児者が身近なところでゆっくりと入浴できる機会を増やすために、通所施設や高齢者施設等分野を超えて入浴にかかる支援者をつなぐ取組を進めています。

令和3年度は湖北エリアでの取組を計画していましたが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、当事者の外出や施設の対応が難しく、関係者への研修や啓発に留まりました。

今年度も湖北エリアにおいて新型コロナウイルス感染症の状況を見ながら、身近なところで入浴ができるよう本人や家族と相談支援員や事業者などの支援者をつなぐための具体的な取組を進めます。



▲入浴の様子



えにしの日・えにし週間

東日本大震災が発生した3月11日を「えにしの日」、前後一週間を「えにし週間」として、災害時に支援を必要とする人の側に立った訓練や学習会等の取組を、県民運動として広げています。

<作ってみよう 非常用袋 参加者感想>「一目見て防災とわかる啓発につながり、テレビでも3.11がとりあげられるこの時期に取り組むことは、子どもたちへの繰り返しの学習となり、とりわけ大きい意味がある。」

<ダンボールの家づくり 参加者感想>『せまい・くらい場所にいる体験により地震は身近にあるものとして考えることができた。』

令和3年度は、訓練・学習会、コロナ禍における災害対策、子どもの防災教育を重点取組として呼びかけたところ13団体が実施しました。

